

子規・漱石から虚子へ

— 自恃の精神 —

柴田 奈美

はじめに

正岡子規・夏目漱石・高浜虚子は、それぞれ影響を与え合いつつ、自分の文学を確立していった。

子規と漱石は、帝国大学予備門時代以来の同年齢の親友であった。子規と虚子は、八歳違いの同郷の子弟関係にあった。漱石と虚子とは、子規を介して知り合った友人で、子規没後も親しく交流を続けた。虚子にとっては漱石は、師の友人であり、また自分の年上の友人でもあったわけである。

この虚子が、子規・漱石からの精神面の影響について、『俳句の五十年』（中央公論社 昭17・12）の中では、次のように回想している。

「子規から受けた感化の中で、一番大きいと思ふ事は、自ら恃むといふ事でありました」。「不遜とか傲岸とかいふ意味で人から多少嫌はれるところもあつたのでありますが、しかしながら又、他からも頼もしがられるといふやうな傾きも多かつたのであります。その気風は、自然私にも感化を及ぼしまして、

たやすく他人の言説に惑はされない、しつかり自分を守るところがなければいけないといふ考へを起こさしめるやうになつたのであります」(「自ら恃む」)。

「私が一番大きな影響を受けた人は、いふまでもなく正岡子規であります。それは私の最も若い時分に覆ひかぶさつてきた最も大きな勢力も子規でありましたから、子規の感化といふものは自分が意識するとせざるとに拘はらず随分大きなものがあると思ふのであります。次いで夏目漱石の影響も亦あつたやうに思ふのであります。尤も子規の影響といふものは、人間としての私を作り上げる上において大きなものがあつたと思ふのであります。漱石の方は、その点においては、格別大きなものがあるといふわけではないのであります。何となく尊敬すべき先輩として漱石を眺めておつたといふことと、漱石は常に静かな態度で私の文芸上の作品に眼を止めてくれてををつたといふこととであります」(「影響を受けた人」)。

「子規の人格から受けた影響は、やはり大きなものがあるものであります。子規の魂はやはり私を支配してゐるといつてもいゝと考へるのであります。漱石の影響の方はそれほど大きなものはないのであります。しかしやはり私にとつては、二人の先輩として子規と漱石を見てをつたといふ事が偽りのない告白であるといつていゝと思ひます」(「二人の先輩」)。

このように、昭和十七年当時の虚子の文章によると、子規の影響に比べ、漱石からの影響は「それほど大きなものではない」という

程度として書かれているが、漱石が虚子に与えた影響とは、本当にその程度のものであったのであろうか。

回想時の昭和十七年という年は、漱石との交流をもった時期から三十年以上経っている。それに加え、虚子は帝国芸術員会員にもなっており、俳壇における地位も確固たるものである。そのため、明治二十年代から同四十年代の頃、つまり実際に漱石と深く交流をしていた頃の漱石評価とは、ずれが生じてきていることが考えられる。

本研究では、自恃の内質の比較や、交流をなされていた頃の書簡、各自の俳論等を中心に考察することによって、漱石から虚子への影響のあり方を明らかにしたい。

一、子規・漱石・虚子の各自の自恃

まず、子規・漱石・虚子の三人の抱いていた「自恃」の内質について、それぞれ考察したい。

(1) 子規の場合

子規は、明治維新の前年に、伊予温泉郡藤原新町で生まれ、松山藩士を父にもつ。武士の子ともであるというプライドは高く、明治二十四年に漱石に送った「気節」について書いた書簡に、それがよく表れている。この書簡そのものは現在残されていないが、これに反論した漱石の書簡から、子規の士族意識を推察することができる。

「君の書に曰く、試みに学校の児童を見よ工商の子多くは上座にあり士家の子多くは末席にあり然れども其学校を出づるや

工商の子弟は終に士家の子弟に〔一籌を〕輸するを常とすと」。

「気節の有無は教育次第にて工商の子なりとて相応の教育を為し一個の見識を養生せしめば敢て士家の子弟に劣らんとも覚え暫らく気節は士人の手に落ち工商の夢視せざる処とするも是は工商たるが為に気節なきにあらずして気節を涵養するの時機に合せざりしのみ試みに士家の子弟をとりて幼少より丁稚たらしめば数年を出ずして銅臭の兒とならん君の議論は工商の子たるが故に気節なしとて四民の階級を以て人間の尊卑を分たんかの如くに聞ゆ君何が故か、る貴族的の言語を吐くや」(明24・11・7日付 子規宛書簡)。

この書簡から、子規の漱石宛書簡中で、子規が気節は士族にだけ備わっているもので、その他の身分の人間に対する士族の優位について述べていたことがわかる。

漱石のこの書簡に対して、子規からの反論があったようで、子規の反論に対する漱石の書簡が現存しているので、次に紹介しておく。

「気節は(己れの見識を貫き通す)事と申し上候積り此(見識)は智に属し(貫く)(即ち行ふ)は意に属す行はずして気節の士とは小生も思ひ申さず唯行へと命令する者が情にもあらず意にもあらず智なりと申す主意に御座候」。

この書簡から、漱石が気節は智に属すものとするのに対し、子規は意に属すものという主張をしたことがわかる。両者とも己れの主張を曲げず、お互いの見解を確認したことで、この論争は終わっている。

子規の意志を重視する考えは、次に引用する明治二十三年の「下手の長談義」(「筆任勢」)の文章にも見られる。

「人間の中で意志(意志)の強いやつが所謂英雄豪傑となり意志の弱いやつが卑怯者としてしらるゝなり 自殺者の如きは意志の尤弱きものならん、されば一定の目的ありてそれに達せんとの所望はありながら 意志の弱きために勉強する能はずして懶惰となり、従て目的に達せざるが如きは卑怯の隊長にていかにも残念の至りならずや」。

子規は、気節の中核を「意志力」と考えた。この意志力は、士族のみが持つとし、他の階級に対する士族の優位をこの点に見出しているのである。自分は、この立派な気節、つまり強い意志を持つ士族の出身であるという自恃の精神に支えられて、超人的な仕事量を病臥の身となつても、こなしていったものと考えられる。

(2) 漱石の場合

漱石は、子規の自恃の精神に当たるものを、英国留学中に身につけた。そのことを、大正三年の「私の個人主義」の中で述べているので、次に引用する。

「此時私は始めて文学とは何んなものであるか、その概念を根本的に自力で作上げるより外に、私を救ふ途はないのだと悟つたのです。今迄は全く他人本位で、根のない萍のやうに、其所いらをでたらめに漂つてゐたから、駄目であつたといふ事に漸く気が付いたのです。私のこゝに他人本位といふのは、自

分の酒を人に飲んで貰つて、後から其品評を聴いて、それを理が非でもさうだとして仕舞ふ所謂人真似を指すのです」。「近頃流行るベルグソンでもオイケンでもみんな向ふの人が兎や角いふので日本人も其尻馬に乗つて騒ぐのです」。「つまり鵜呑と云つてもよし、又機械的の知識と云つてもよし、到底わが所有とも血とも肉とも云はれない、余所々々しいものを我物顔に喋舌つて歩くのです。然るに時代が時代だから、又みんながそれを賞めるのです」。「けれどもいくら人に賞められたつて、元々人の借着をして威張つてゐるのだから、内心は不安です」。「私は此自己本位といふ言葉を自分の手に握つてから大変強くなりました。彼等何者ぞやと気概が生まれました。今迄茫然自失してゐた私に、此所に立つて、この道から斯う行かなければならないと指図して呉れたものは実に此自我本位の四字なのであります」。

漱石の自恃の精神は、西洋の価値観に対する日本人である自分の判断力への自信を支えるものであった。

二年間の英国留学中を回顧して、「ロンドンに住み暮らしたる二年はもつとも不愉快の二年なり。余は英国紳士の間にあつて狼群に伍する一匹のむく犬のごとく、あわれなる生活を営みたり」(「文学論」序)と、留学中に、西洋に対する劣等感を感じたことを述べている。こうした体験を通して獲た自恃の精神であつたわけである。

西洋文学に対する劣等感というのは、漱石の帝大生時代の教育学論文「中学改良策」(明25・12月稿)に、すでに表れている。

論文第三編第三「生徒の改良」中の「德育の改良」で、次のよう

に述べている。

まず、「漢文国語及び日本支那歴史は日本人の道徳を堅固にするに必要」と、道徳心を育成するための教材として、その価値を認めた発言をする一方で、「憾む所のものは日本に国民を代表すべき程の文学なき」とし、伝統文学作品の中に、世界に誇るべき日本を代表する文芸作品の無いことを嘆いている。ただ、人間を高尚優美にする、という精神面で西洋文学より誇れるものがあり、それは俳諧である

と述べる。

文芸作品として、日本が西洋に誇れるものは日本の伝統文芸の中には無いとするこの考え方は、英国留学から帰国後も変わらず、評論の中で次のように述べている。

「自体我日本は不幸にして、文学の方面に於ては昔から外国に向つて誇り得るゝ誇るに足るべき文学はないと思ふ。或は比較的あるかも知れぬ。然し大きな顔をして世界の舞台に濶歩し得るやうなものは、どうも見当らない」（「戦後文界の趨勢」「小説」明38・8・1）。

「我国に大文学の出るのは次の時代である。即ち今の青年及び之から生れる人々に依つて作られるだらうと思ふ。今迄は古来の文学を復起してそして西洋文学を模倣するに止まつたので、真の日本文学の起るのは何うしてもこれから後でなければならぬ。従来に於ける文学者は徳川時代の文学を再興したと云ふに過ぎぬので更に何等の特色もなく又大作物も出なかつた。そして少し進んだ人々が西洋文学の模倣をした位であるから自家独

特の作物がない」（「文学者たる可き青年」「中学雑誌」明39・11・1）。

「新しい眼で日本の過去を振り返つて見ると、少し心細い様な所がある」。「文学文で云ふと、殆んど過去から得るインスピレーションの乏しきに苦しむと云ふ有様である。人は源氏物語や近松や西鶴を挙げて吾等の過去を飾るに足る天才の發揮を認めるかも知れないが、余には到底そんな己惚は起せない」。「余が現在の頭を支配し余が将来の仕事に影響するものは残念ながら、わが祖先のもたらした過去でなくつて、却て異人種の海に向ふから持つて来てくれた思想である」ので「非常に意気地のない心持がした」（「東洋美術図譜」「東京朝日新聞」明43・1・5）。

漱石の場合、日本文界の現状をこのように把握した上で、不安感を打破するために、是非持たざるを得なかつたのが、「自己本位」（自恃の精神）であつた。

外国に誇り得る作品を、これから作り上げなくてはならぬ作家としての自分に、強い自恃の精神が必要であつたのである。評論の中で、次のように漱石は述べている。

「凡て物を判断するの標準は世と時とを問はず現在が標準である。自己が標準となるのである」。「標準は自分自身で定めなければならぬ」。「吾人の得た標準から判断するのを正当とするのである。文学上の判断としても決してこれ以外に亘るべきものではない」。「凡ての發達は如何しても人間に気力―精神

がなければ出来ぬ。精神といふのは自分はこのだけの事が出来るという自信自覚の力である。この自覚自信の無い国民は国民として起つことは出来ぬ。個人として墮落したもの、自ら立つことは出来ない。漸く人真似をするより仕方ない。これを移して文学の方面にいへば、その製作にも特性を具へたものは出来ないのである」(「戦後文界の趨勢」「新小説」明38・8・1)。

「誰が何と云つても、自分の理想の方が、ずっと高いから、ちつとも動かない、驚かない、何だ人生の意義も理想もわからぬ癖に、生意気を云ふなと超然と構へる丈に腹が出来てゐなければなりません。是丈に出来て居なければ、いくら技巧があつても、書いたものに品位がない」(「文芸の哲学的基礎」明40・4・20 講演)。

特に、明治四十年の「文芸の哲学的基礎」の講演は、教師をやめて朝日新聞社に入社し、プロの作家となることを決意した後のもので、作家としての強い自恃の精神がうかがわれる。

因みに、子規の場合は、次の虚子宛書簡に見られるように、日本人を代表する作家として幸田露伴を考えている。

「幸ナルカナ獨リ露伴ナル一詩人(小説家トイヒタクバソレニテモ宜シ)アリ破天荒ノ筆法ヲ以テ優美ト宏壯トヲ兼ネタル大著述ヲナセリ(風流佛ヲ最トス其他亦能ク両方ヲ有ス他人ニハ決シテ無之)彼レノ著述に右二分子を含有スルノ多キハ明治第一ナリ否日本第一ナリ否世界第一。同人ノ著他ニハ欠点アルベシ優美ト宏壯ノ二分子ヲ含ムコトニ於テハ世界第一ノ称敢テ

詔諛に非ズ」(明24・12・31)

文学の要素として「宏壯」「優美」の二点を挙げ、両者を具備する作品を創る作家として露伴を示し、特に「風流佛」については、最も優れた作品として「世界一」と推しているのである。

また、明治三十一年の「六たび歌よみに与ふる書」の中では、

「僅少の金額にて購ひ得べき外国の文学の思想などは続々輸入して日本文学の城壁を固めたく存じ候」

と述べ、文学革新のために、積極的に西洋をとり入れる姿勢を示している。そこには、漱石のような、

「余が現在の頭を支配し余が将来の仕事に影響するものは残念ながら、わが祖先のもたらした過去でなくつて、却て異人種の海の向ふから持つて来てくれた思想である」ので「非常に意気地のない気持がした」(「東洋美術図譜」前出)

という暗さは感じられない。

(3) 虚子の場合

虚子は明治七年松山市生まれ。父は松山藩の剣術監を勤め、後には祐筆に転じた文武両道の武士であった。が、廢藩置県後世の中を見限り、剣と筆を捨てて帰農を志した。虚子も士族の出身であったが、父のこのような生き方、そして母の「怖いものには近よるな」という教えの影響のためか、子規のような士族優位の階級意識は、その言動の中には見られない。

虚子の場合、俳句の面に限ってみると、俳句初学の頃に、親友

河東碧梧桐に強いコンプレックスを抱いていたことが指摘できる。そのことを示す次のような子規宛書簡がある。

「生熟々思ふに青桐氏ハ一見アートの人間たるハ明なると同時に生ハ一見尤爰に拙なるものにハ非ざるか（もとより美文上の論なり）」（明25・10）。

碧梧桐の技巧に優れた作風に比べ、自分の作品が拙なく思えて悲観しているのである。

明治二十六年の子規宛書簡の中には、碧梧桐の名は無いが、天才肌の碧梧桐と自分を比べて、自分は天才でないことを悩んでいる気持ちを感じている。

「天才ハ以テ直ちに成功を求む可きに非ざるも成功の一大要素たることハあさむかざる真理かと存候　さるに我身をかへり見れハ実な一点の長処なき人間……」。「噫一毫の天才なき虚子ハゆめ／＼英雄などの大望ハ無益也望む所ハせめて愚者にて終らざるにあり　唯謹慎に謹慎を重ねて勉強するより外ハ身を処するの道なく候　我ながら憐れむ可き因果の男候よ」。「創造力ハ小生ほど乏しきものハ無御座候　暗記力亦然り　小生取る可き処果して何ぞや　これを補ふ道忠実なる努力と時間のみ」（明26・5・26日付書簡）。

「天才」の無い自分に悩む虚子ではあるが、そのことで自暴自棄にはならず、自分の取るべき道を「忠実なる努力と時間」と割り切つて、こつ／＼と努力する道を選んでいこうという姿勢の見られる点を、指摘しておきたい。

さて、ここで、子規から碧梧桐と虚子が、初学の頃にどのように評価されていたのかを、子規の評論「文学」（「日本人」明29）を引用しつつ、明らかにしたい。

虚子はその才能をうらやんだ碧梧桐は、初学の三年間は、次のように子規から評価され、期待されていた。

「河東碧梧桐が俳句なる者を認めたるは明治二十三年の頃なるべし。二十四年より作りはじめたるに其敏才ははやく奇想を捻出し句法の奇なる者を作り以て吾人を驚かしぬ」。「彼は少年を以て一躍して文学の海中に入りたしかに手中に一個の宝珠を掘りたるが如し」。「明治二十五年には一段の進歩を為す」。「此時は碧梧桐が思想に於て奇抜なる、句法に於て老成したる時代なり」。

このような早熟な碧梧桐に比べ、同じ時期の虚子の方の評価は、「明治二十四年に俳句を作り初めし以来二三年間は其進歩撻々しからず、遠く碧梧桐の才思煥発せるに及ばざりき」という、あまり芳しいものではなかった。

この点を虚子自身も自覚し、天才ではないと悩んでいたものと思われる。

虚子と碧梧桐とは同郷の親友。学校・学科も同じで、当時は下宿も同じであったため、師である子規が両者を比べて評価する機会が多かったであろう。そのため、虚子の劣等感、他に優れた俳友が存在していたものの、専ら碧梧桐に対するものが大きかったと考えられる。

明治二十四年から同二十六年頃まで、碧梧桐優位の評価が続くのであるが、その後子規の二人に対する評価が大きく変つてくる。

まず、碧梧桐については、次のように述べている。

「二十七年春以後は毫も進歩を為さざりき。曩時の麒麟児も一個の豚犬と化し去りぬ。由来彼は秩序的の能力と推理的の常識とを欠ぐ者、少時に在りて敏才の人を驚かしたるは彼の不規則なる発達がたま／＼文学の方面に向ひしが為めなるべし。薄弱なる彼の脳漿は平和なる時沈静し居る時に当りて初めて用を為すべし。一たび外部の刺激に逢へば脳漿忽ちに混乱すべく、

混乱して後は殆ど狂の如く愚の如し」。明治二十八年は最早学課無く束縛無く詩人として如何様にも発達すべき機会に遭遇せり。然れども其混乱せられたる頭脳は未だ沈静せざるがため彼は平凡凡なる一年を送りたり。或は人をして邪路に陥るにはあらずやと疑はしむるに至りぬ」。

停滞気味の碧梧桐に対し、虚子の方は次のように子規に評価されている。

「虚子は厚く志し深く思ひ孜孜として勉め遅遅として進む者なり。明治二十七年の春碧梧桐の俳句振はざるに至りし頃より虚子はやうやくに頭角を現しぬ」。二十七年は虚子が始めて詩人の幻影を拝したる時なり。俳句乳臭を脱して漸く老成の域に進まむとす。平易の中に趣味を寓する処に於て既に碧梧桐を超えたり」。

ひらめきに頼る碧梧桐の性質を子規は「秩序的の能力と推理的の

常識を欠く」とし、その欠点を言い当てている。一方、虚子については歩みは遅いものの、一歩／＼堅実に進歩していると評価している。明治二十六年五月の子規宛の書簡中で、「忠実なる努力と時間」を誓つた虚子の努力の成果であると考えられる。作品とともに、その努力を評価した子規のものいいである。

明治二十九年には、碧梧桐が再び評価され、その特色が紹介されている。

「最早脳漿沈静したりとおぼし。彼はたしかに一点の靈光を拝したるに相違あらじ。其俳句は一種の趣味を具へてしかも古人の言はざる処をのみ言へり。而して其句法一として勁拔ならざるは無し」。碧梧桐既に印象の明瞭なる者を好む、従つて客観の事物といへども壮大に過ぎて茫漠たる者を排す。況して主観的の句に至りては殆ど全く之を排し去りて毫も取る所なし。是れ其性質の然らしむる者碧梧桐は始終此俣にて押し行くべし。故に其作句亦主観的なる極めて稀なり」。

一方、虚子の方も碧梧桐と比肩して、大きく評価されている。

「明治二十九年が碧梧桐の俳句に一紀元を与へたるが如く虚子にも亦一紀元を与へたり。否寧ろ虚子が明治二十九年の俳句に一紀元を与へたり」。精神徒に激昂して熱情焼くが如く、頻りに空華水影を採り来りて神仙体の句を為す。「秋に至りて此等の新想異調は全く調和して一種未曾有の新調として現れぬ」。

「吾は（碧梧桐の印象明瞭なる俳句と共に）此等時間的人事的主観的の俳句が、蕉風檀林の外に元禄天明の外に、明治の新調を

為したるを喜ぶものなり」。

以上のように、子規は碧梧桐、虚子という二人の弟子の、初学の年から明治二十九年までの歩みを概観する中で、次のように端的に二人の詩人としての性質を言い表している。

「詩人の頭脳に両面の活動あり。一面は冷淡に社会を觀察して、他の一面は熱情を以てある事物に同感を表す」。「前者に僻するを写实派と言ひ後者に僻するを理想派といふ。碧梧桐は冷かなること水の如く、虚子は熱きこと火の如し。碧梧桐の人間を見るは猶無心の草木を見るがごとく、虚子の草木を見るは猶有情の人間を見るがごとし。随つて其作る所の俳句も一は写実に傾き一は理想に傾く、一は空間を現し一は時間を表す。是れ二人の全く相異なる所なり」(「文学」前出)。

師である子規に、以上のように評価され、虚子は碧梧桐とは異なる自分の個性を認識し、自信をもって句作に励んでいたのである。この時期に抱いた自恃の精神が、子規没後の「温泉百句」をめぐるの碧梧桐との対立の中で、対等に自分の論を主張していく態度を、虚子にとらせたのである。

その後、虚子の自恃の精神に関わる対象は、新傾向俳句、新興俳句、第二芸術論など、時期によって異ってくるが、自分の道を自信をもって進んでいこうとする態度が、次のような発言に窺われる。

「平板浅膚なる写生句といふことが我雑詠を攻撃する諸君の常套語に候。平板浅膚なる写生句、結構と存候。斯くして写生の技倆を練り順次各自の境地を拓かるべく候」(「消息」「ホトト

ギス」大14・10)。

「新しい作家が絶えず出て来る、常に其を喜び迎へてをる……唯私は自分の句の領分を守つてゐて少しも周囲に驚かされぬ」

(「還暦座談会(三)」「ホトトギス」昭9・4)。

さらに、第二芸術論をどう思うかという新聞記者の問に対し、「あんなものは問題にならん。第二でも第八でも第十でもかまわぬ。いくらけちをつけようたつて、俳句のバリユーもプライスも一向変らぬ」(「ホテルの窓」(掲載紙不明)昭25・4・1)と発言したのは有名である。

虚子の自恃は、碧梧桐に対する劣等感の克服を核としたものであったと考えられる。

以上、三者の「自恃」の内質について、考察してきた。虚子の「自恃」は、子規のような士族優位の階級意識に支えられたものではなく、劣等感を抱いていた対象(碧梧桐)への精神的克服に関わるものであった。これは、漱石が西洋に劣等感を抱き、それを克服するために獲得した「自己本位」という自恃の精神と同質のものである。

ただし、虚子の場合には漱石のような西洋に対する劣等感は見られず、次のような発言をしていることを指摘しておきたい。

まず、初期の明治二十五年には、子規が幸田露伴を優美宏壯の点で世界一とするのに賛意を表している(明25・1・23日付 子規宛書簡中)。

そして昭和の頃は、

「花鳥諷詠は退いて俳句本来の面目を守る許りでなく、進んで是世界に推し出して日本文学の誇とする」(「東風漫語」「ホ

トトギス」昭10・5)

と述べ、世界に誇り得る文芸としての自恃の精神を抱いた発言をしている。

二、漱石と虚子の交流

(1) 初対面の印象

漱石と虚子とは七才違いであり、初めて虚子が漱石と出会った明治二十五年、漱石は子規と同じ帝大生であり、虚子は伊予尋常中学校を卒業したばかりであった。

初対面の虚子の漱石に対する印象は、『漱石氏と私』(アルス 大7・1 〈近代作家研究叢書16〉)に次のようにある。

「私が漱石氏に就いての一番古い記憶はその大学の帽子を被つてゐる姿である。時は明治二十四五年の頃で、場所は松山の川の川に沿うた古い家の一室である。それは或る年の春休みか夏休みかに子規居士が帰省してゐた時のことで、その席上には和服姿の居士と大学の制服の膝をキチンと折つて坐つた若い人と、居士の母堂と私があつた」。「他の二人の目から見たら其頃まだ中学生であつた私はほんの子供であつたであらう。又十

七八の私の目から見た二人の大学生は遙かに大人びた文学者としてながめられた」。「その席上ではどんな話があつたか、全く私の記憶には残つて居らぬ。たゞ何事も放胆的であるやうに見える子規居士と反対に、極めてつゝ、まじやかに紳士的な態度をとつてゐた漱石氏の模様が昨日の出来事の如くはつきりと眼に残つてゐる。漱石氏は洋服の膝を正しく折つて静座して、松山鮮の皿を取上げて一粒もこぼさぬ様に行儀正しくそれを食べるのであつた。さうして子規居士はと見ると、和服姿にあぐらをかいてぞんざいな様子で箸をとるのであつた」(「一」)。

虚子の漱石に対する初対面の印象は、「極めてつゝ、まじやか」で「紳士的」であり、放胆な子規とは極めて対照的に見えたようである。そして、「大人びた文学者」として眺めていたのである。

この好印象に加え、子規が虚子に語つた次のような漱石像が、虚子の漱石に対するイメージをさらによくしていったと思われる。

「その後も子規居士の口から漱石氏に就いての話はしばしば聞いた。極く真面目に勉強する人で学校の成績が常に、といふことや、学資を得る為に早稲田の専門学校に行つてゐるといふことや、その他今記憶に残つてはゐないけれどもいろいろの話聞いた。居士がその親友として私に話した人の名前は余り沢山なく、菊池謙二郎、秋山真之、其他二三の人であつたが、同じ文学に携はる者としては夏目といふ名前がしばしば繰返された」。

さらに、

「明治二十八年に私は松山に帰省した。私は明治二十五年に松山を出て京都に遊学し、それから仙台、東京と処を替へたのであつたが、この明治二十八年に帰省した時に、漱石氏は大学を出て松山の中学校の教師になつてゐたので、それを訪問してみることを子規居士から勧められた」（同）

とあるように、子規は虚子に漱石との交流を積極的に勧めていた。

尊敬する子規が、親友として一目置く漱石を、虚子が敬慕するようになったことは明らかである。

因みに、虚子の親友で子規の弟子であつた河東碧梧桐は、子規と漱石の関係をどのように見ていたのかを、『子規の回想』（昭南書房 昭19・6・10）を引用し、明らかにしたい。

「漱石と子規の交際は一高時代からの同窓といふだけで、お互ひに談心の友として許すほどの深みを持つてゐなかつた。同窓生の中ではまア／＼話せる男位に子規は思つてゐた。漱石もまだ小説を書かうといふやうな野心も抱いてゐなかつた。そんな水商売ちみた文士なんぞになる俺ではない、と高く己を恃んでゐた時でもあつた。文学の話なんか漱石にはわからないと見くびつてゐた子規も、何処かに気心の知れた親しみと暖か味の結びつきがあつた」。

「初めて漱石といふ雅号を見て、それが誰であるかを質した時、夏目といふ男にはとてもわかるまい、と思つてゐたが案外なもんだ、と言つて、子規は一つの奇蹟のやうに話したこともある。後に漱石が洋行中からよこした『倫敦塔』を見た時には、

子規は更らに驚異の眼を輝かして、素人の筆ではない、もう堂に入つてゐると、三嘆した事もあつた」。「子規が半ば俗物視してゐた漱石の盛名隆々たる事実を自己の不明に帰するだらうか」（二十九、漱石と子規）。

このように、子規は碧梧桐に対しては、漱石が「倫敦塔」を書いて送ってくれるまでは、漱石を「見くびり」、「半ば俗物視」した言ひ方をしてゐたことがわかる。子規を師としていた若い碧梧桐には、それがそのまま漱石像となつていったことが窺えるのである。

虚子と碧梧桐とで、なぜこんなにも漱石に関する子規からの情報がいふだけ異なるのか疑問であるが、虚子が漱石との初対面で好印象をもち、子規が虚子に漱石について好ましい情報を与えたことが、その後の虚子と漱石の深い交流に、大きな影響を与えたことは確かである。

(2) 漱石と虚子の交流

明治二十九年二月、虚子は「兄大病のため帰れ」の電報を受け取り、松山に帰郷した。この時、漱石をしばしば訪問し、一緒に道後の温泉に行ったり、俳句を作ったりした。この当時を回想した虚子の次のような文章がある。

「或日漱石氏は一人で私の家の前まで来て、私の机を置いてゐる二階の下に立つて、

『高浜君。』と呼んだ。其頃私の家は玉川町の東端にあつたので、小さい二階は表ての青田も東の山も見える様に往来に面して建

つてゐた。私は障子をあけて下をのぞくとそこに西洋手拭をさげてゐる漱石氏が立つてゐて、又道後の温泉に行かんかと言つた。そこで一緒に出かけてゆつくり温泉にひたつて二人は手拭を提げて野道を松山に帰つたのであつたが、その帰り道に二人は神仙体の俳句を作らうなど、言つて彼れ一句、これ一句、春風駘蕩たる野道をとほくと歩き乍ら句を拾ふのであつた。此神仙体の句は其後村上霽月君にも勧めて、出来上つた三人の句を雑誌めざまし草に出したことなどがあつた」〔漱石と子規〕（前出）〔二〕。

この時の虚子の作品は、

海に入て生まれ更らう朧月

神の子の舞ひく春の入日かな

紫の雲舞ひ降りる焼野かな

などであり、漱石の作品は、

春の夜の琵琶聞えけり天女の祠

路も無し綺楼閣梅の花

蛤やをりく見ゆる海の城

などである。両者とも、空想・幻想から発想した自在な句風の作品を成している。

この頃の子規は、写生を方法とした作句法を唱えており、空想・幻想から発想したものを遠ざけていた。これらの神仙体の句は子規の指導の枠外において、漱石との交流の中で生み出された作品であつたわけである。

因みにこの神仙体の作品は、のちに子規によつて、

「明治二十九年が碧梧桐の俳句に一紀元を与へたるが如く虚子にも亦一紀元を与へたり。否寧ろ虚子が明治二十九年の俳句に一紀元を与へたり」。「精神徒に激昂して熱情焼くが如く、頻りに空華水影を採り来りて神仙体の句を為す」。「秋に至りて此等の新想異調は全く調和して一種未曾有の新調として現れぬ」〔文学〕前出。

と評価され、虚子の個性として認められた。

以上のような文芸的な交流を重ねた松山での明治二十九年の春であつた。同年四月十日、漱石が熊本の高等学校に赴任する折、漱石がすすめるままに、虚子は巖島まで同船した。その時の回想を『俳句の五十年』（前出）の中で、虚子は次のように述べている。

「その時分に漱石は私に、自分は少し月給を沢山貰ふやうになつたから、若干の金を君にやるから少し勉強をしろといふやうな事をいつた事がありました。その時分の私は、乏しい学資でやうやく下宿料が払へるくらゐのものでありまして、余分の書物を買ふといふやうな金はなかつたのでありましたから、喜んで好意を受けて、月々五円であつたか十円であつたかの金を送つて貰ふことになつたのでありました。さういふ点でも、漱石に負ふところは多いのでありました。その時も宮島の紅葉をみて、お互ひに俳句を作つたりして袂を分つたのでありました」。漱石は、虚子の人柄を気に入って、学資の援助を申し出、虚子も「喜んで好意を受け」たのである。このような密度の濃い交流がなさ

れていた点に注目したい。

このような人間関係を土台として、次に示すとおり、文芸的な交流の密度も深まっていつている。

まず、明治二十九年十二月五日附の漱石が虚子に宛てた手紙には、次のようにある。

「今日日本人三十一号を読み君が書翰体の一文を拝見致し甚だ感心いたし候。立論も面白く行文は秀で、美しく見〇〇申候。此道に従つて御進みあらば君は明治の文章家なるべし。益々御奮励の程希望候」

この中で「書翰体の一文」とあるのは、「日本人」に連載していた俳話の一章であり、虚子はその後、子規を中心とする人々の最初の俳句集『新俳句』の序文に、この文章を使った。漱石のこの評価に自信を得たことがその理由として考えられる。

右の書簡中には、虚子の当時の作風に対する批判も見られる。

「子規子が物したる君の俳評一読是亦面白く存じ候。人事的時間的の句中甚だ新にして美なるもの有之候様に被存候。然し大兄の御近付中には甚だ難渋にして詩調にあらざるやの疑を起し候ものも有之様存候」。

この「難渋にして詩調にあらざる」というのは、五七五の定型の調子を破った乱調の作風を指したもので、当時子規が「人事的俳句」「時間的俳句」などととともに、新しい俳句として認めていたものである。これに対し、漱石は、「人事的時間的俳句」は認めたものの、乱調の句については厳しく批判している点に注目したい。

その後の虚子は、例えば『俳句入門』（明31）などの俳論において、十七字と季題趣味の絶対論、音調重視を唱え、句風も落ち着いてくる。明治二十九年一月の時期に、

「十七字といふ要件が俳句なる一詩体をして存立しむる所以、若し十七字にして毀たれんか俳句乃ち亡ぶなり、されば俳句の運命を支配するものも十七字、俳句の特性を保たしむるも亦十七字なり」（『俳句に於ける人事趣味』「日本人」明29・1・5）と述べており、十七字の定型を守ることの重要さを認識した発言をしている。理論面ではこのように考えつつも、乱調の作を為していたもので、それを漱石に批判され、理論に実践を近づけていったものと考えられる。

後年、虚子は指導者としての子規を、次のように述べている。

「居士は常に碧梧桐君と私とを以て俳句の傾向の急先鋒としてゐた。さうして我等を常に推奨し弁護することを忘れなかつた。けれども此処に大に注意すべき一つの事は居士自身が決して其急先鋒に立たず又急先鋒に立たうとしなかつたことである」。「其が今日から見ると居士の獨り偉大な点であつて、常に自ら中堅に在つて、決して軽進せず、先陣、後陣を取纏めて隊伍を乱さず其堂々の陣を進め得た所以であつたのである」

（『正岡子規』中「子規語録」甲鳥書林 昭18）。

「新調」と称して乱調の句を作ることなどを「軽進」とし、「急先鋒」に立って「軽進」していた自分の行動を反省する気持ちも読みとれる。

明治二十九年の漱石の乱調への批判が契機となって、「軽進」の危うさに気づいたということも考えられる。

無批判に子規の理論を自分の実践に取り入れることを、自戒していることが窺われる。

次に、明治三十二年十二月十一日附の漱石の虚子宛書簡を紹介したい。これには、虚子の経営する「ホトトギス」についての忠告が書かれている。

「ほと、ぎす」が同人間の雑誌ならばいかに期日が後れても差支なけれど、既に俳句雑誌杯と天下を相手に呼号する以上は主幹なる人は一日も発行期日を誤らざる事肝要かと存候。「ほと、ぎす」中にはま、楽屋落の様な事を書かれる事あり。「苟も天下を相手にする以上は二三東京の俳友以外には分らず随つて興味なき事は削られては如何。加之品格が下る様な感じ致候」。漱石は「ホトトギス」を精読していたようで、子規が亡くなった後にも、いろいろとアドバイスを虚子に送っている。

「僕つらく思ふにホト、ギスは今の様に毎号版で押した様な事を十年一日の如くつゞけて行つては立ち行かないと思ふ。俳句に文章にもつと英気を鼓舞して刷新をしなければいけないですよ。ホトトギスも売れるうちに色々考へて置かねばならんでせう。先づ巻頭に毎号世人の注意をひくに足る作物を一つ宛のせる事が肝心ですね。夫から君は毎号俳話をかいて、四方太は毎号文話でもかいたらどうです。」「ともかくもつと活気をつけたいですね」(明39・1・26日附虚子宛書簡)。

「雑誌五十二銭とは驚いた。今迄雑誌で五十二銭のはありませんね。」「うれなかつたら是にこりて定価を御下げなさい」。

「雑誌がおくれるのはどう考へても気になる。」「雑誌を五十二銭にうる位の決心があるなら編集者も五十二銭がたの意気込みがないと世間に済みませんよ」(明39・4・1附虚子宛書簡)。

「ホトトギス昨二十五日と、今二十六日をつぶし拝見、諸君子の作皆面白く候。其中で白川のが一番劣り候。あれは少々イカサマの分子加はり居候。他は皆真物に候。」「猶向後もホトトギス同人の健在と健筆を祈りて聊か茲に敬意を表し候。」「ホトトギスは広く同人の小説を掲載すると同時に大いに同人間の論客を御養成如何にや」(明41・12・26日附虚子宛書簡)。

このように、漱石は雑誌経営上の忠告を具体的に虚子に与え、激励していた。

漱石は「ホトトギス」に発表した虚子の文章にもよく目を通し、俳句に関するものとしては、「連句論」、「俳諧スポタ経」について共鳴している。

明治三十七年九月号の「ホトトギス」に、虚子は「短詩形の人事詩」として連句の文芸性を認める論文を発表した。子規は連句には文学以外の分子が入るので、否定的な見方をしていたのだが、虚子は子規生前の明治三十三年、すでに「俳話二則」で連句を認める見解を発表していた。その考えを深め、「連句論」として再度自分の連句評価の考えを発表したわけである。この論文についての、虚子の身近な人々の反応を「漱石氏と私」(アルス 前出)の中で回想して

いるので、次に引用する。

「明治三十七年の九月に漱石氏を訪問して見ると席上に四方太君も居つた」。「話が連句論になつた時に、鳴雪翁や碧梧桐君の連句反対論に対して氏は案外にも連句賛成論者であつた。四方太君もまた賛成論者の一人であつたので三人は忽ちその席上で連句を試むることになつた」。

その後、明治三十七年十月には、虚子・漱石二人で俳体詩「寺三題」を試み、同月、連句を虚子・漱石・四方太の三人で巻き、十一月には俳体詩「尼」を試みるに至つた。子規の切り捨てた連句の世界の再生を、漱石の賛同を得ることによって、積極的に試みる事ができたのである。

続いて明治三十八年九月の「ホトトギス」には、俳話「俳諧スポタ経」を虚子が発表した。

「俳諧スポタ経」は、作句指導の方針を仏教の教えにたとえながら、面白く示したもので、

。俳句を作ることは、四時の寒暑の中に趣味を見だし、楽しむことで、このような生き方は幸福だ。

。俳句は下手でもよい、風物すべてに面白味のあることを知らせたい。

。俳句の天才のある者もない者も、自分の手にすげれば、それぞれ天分相応の花を咲かせてやる。

といった内容を説いた。

これを、漱石が明治三十八年九月十七日附の虚子宛書簡の中で、

「俳仏の御説中々面白くか、れ候」

と述べ、共鳴している。

因みに、碧梧桐は八月十四日から同三十一日まで連日連夜、俳三味の会を催した。「俳諧スポタ経」の掲載された「ホトトギス」九月号に、俳三味の日記句抄二八七句と、碧梧桐の仲間碧童の六十句が掲載されている。天才養成型の碧梧桐の方針に対する虚子の「俳諧スポタ経」であつたわけで、漱石は碧梧桐の方針ではなく、虚子の平凡平明の道に賛同を示したわけである。

(3) 漱石の理論と虚子の俳論

漱石は虚子の俳論を支持し、常に勇気づけ、的確な忠告を与えてきた。この点は、虚子にとって非常に心強かつたことと思われる。さらに、虚子は漱石の理論を、うまく自分の俳論に結びつけ、有効に指導・実践に活用したことを指摘し、漱石の虚子への影響を明らかにしたい。

その具体例として、漱石の「鶏頭」序」の活用を指摘したい。

「鶏頭」序」は、明治四十一年一月一日、春陽堂刊の虚子の短編集「鶏頭」の序文として発表された。

その中で、漱石は虚子の小説の作風を説明するにあたり、「天下の小説を二種に区別」している。即ち「二種の小説」とは、「余裕のある小説」と「余裕のない小説」であり、虚子の小説は前者であると述べる。

二種の小説についての説明を引用すると、「余裕のある小説」と言

うのは、

「名の示す如く迫らない小説である。「非常」と云ふ字を避け
た小説である。不断着の小説である。此間中流行つた言葉を拝
借すると、ある人の所謂触れるとか触れぬとか云ふうちで、触
れない小説である」

と説明し、一方、「余裕のない小説」とは、

「一言にして云ふとセツパ詰つた小説を云ふのである。息の
塞る様な小説を云ふのである。一毫も道草を食つたり寄道をし
て油を売つてはならぬ小説を云ふのである。呑気な分子、気楽
な要素のない小説を云ふのである」

と説明している。

この分類法を、虚子は俳句と他の文芸の關係を示すのに応用して
いる。

まず、昭和四年二月には、「花鳥諷詠」の中で、

「広い文壇にはさまざまのものがあつてよい訳であります。
人情世相を描き、人事の纏綿葛藤を解培し描写した、戯曲小説
の類が盛んなのもまことに結構なことであります。がその傍に
しばらく人事の葛藤纏綿から離れて、自然に愛情を注ぎ、又そ
れに酬ゆる自然の愛情を享受して、自然を愛する文芸があつて
も差支ない訳であります」(「ホトトギス」)。

と述べて、文芸を描く内容によつて二つに分けています。さらに、昭
和二十七年二月には、「花鳥諷詠」(「玉藻」)の中で、

「俳句は生活を詠ひ人生を詠ふ文芸としては、さうつき詰め

たせつば詰まつた(他の或文芸が志してゐるやうな)ことは詠
はうとしても詠へない。「俳句は激越な文学ではない。「ゆと
りのある人生、せつば詰らぬ人生、悠々たる人生それらを詠ふ
のに適したのが我が俳句の使命であると思ふ」。

と、「せつば詰まつた」といった漱石の用いた用語を使いながら、俳
句の特性を述べている。翌年の昭和二十八年一月には、「極楽の文学」
という題で、漱石の分類法を用いている。

「人間に於いて悲惨そのものを描き、痛い所を叩き、痒い所
を搔くといふ文学も又必要であるが、それ等を忘れ去つて歌舞
の世界に遊ぶのも又必要である」。「俳句は花鳥諷詠の文学であ
る。花鳥風月に遊んで此の人生を楽しむといふ事は、俳句の生
命とする所である」。「地獄の文学もとり結構。しかし又一方
に極楽の文学が存在することは、人生にとつて必要な事である」
(「玉藻」)。

漱石が小説を

○余裕のない小説——セツパ詰つた、非常な大問題を扱う

小説

○余裕のある小説——迫らない、呑気な分子、気楽な要素

のある小説

と分類したのに対し、虚子は

○地獄の文学——俳句以外の他の文芸(小説・戯曲等)。せつ

ば詰まつた人生、人間に於て悲惨そのもの

を描く文芸

「極楽の文学——俳句。ゆとりのある、せっば詰まらぬ、

悠々たる人生を描く、花鳥諷詠の文学。

とし、他の文芸に対する俳句の位置づけを行ったのである。

おわりに

子規生存中に、虚子は既に、子規の指導の範囲外、理論の範囲外
に、自分の個性に合った作品がで上がることを意識していた。そ
の個性をまず漱石が認めてくれたことは、大きな自信につながった
ことであろう。

子規没後、革新的な少数精鋭方式の碧梧桐のいき方に対し、虚子
の平凡平明な道を漱石が理解し、その俳論を支持したことも、虚子
にとっては非常に心強かったことと思われる。

漱石が、明治三十八年に野村伝四に宛てた手紙の中で、

「虚子は学問のない男である。ある長い系統の立つた議論も
出来ぬ男である」。しかし、「ある方面に癖して居るかも知れん

が彼の云ふ所は理屈も何もつけずして直ちに其根底に突き入る
断案を下すに於て到底大学の博士や学士の及ぶ所でない」(明38・
6・27日付)

と、理論面での弱さと直観の鋭さを指摘している。このことは、虚
子も自覚しており、

「僕も俳句に対する考——俳話は時々書くことがありますか
ね、それなんかほんの実験談に過ぎない。だから理論的に観た

ら不完全なものである」。[だけれども実験談といふものは力強
いところのあるもので、論理的には不完全でも、すぐ読者の心
の中に飛び込んで、何等かのヒントを与へるものである] (「還
暦座談会(三)」「ホトトギス」 昭9・4)
と述べている。

虚子の理論面の弱さを、漱石の理論が傍らから援護したかたちで
あったといえる。このことが、さらに虚子の自恃の精神を支えたも
のと考えられる。

『俳句の五十年』(前出)の中で、虚子は漱石について、「漱石は
常に静かな態度で私の文芸上の作品に眼を止めてくれてをつた」と
いう程度に述べているが、以上の考察から虚子の文芸活動において、
子規と同じく大きな影響を与えた存在であったことが明らかである。
自分の佳しとした俳句の道を、自恃の精神をもって歩み続けるこ
とができた虚子の傍らには、強力な漱石の理論の支えがあったので
ある。

本研究は一九九四年十月三十日、第十四回子規研究会の会(東京)
において発表した。研究会において、諸先生方よりさまざまな御助
言を頂いた。心より感謝申し上げます。

この研究の一部には、岡山県立大学短期大学部第二回特別研究の
助成を賜わった。記して感謝申し上げます。

〈引用・参考文献〉

- 高浜虚子『俳句の五十年』（中央公論社）昭17
河東碧梧桐『子規の回想』（昭南書房）昭19
『漱石全集』（岩波書店）昭50
松井利彦『近代俳論史』（桜楓社）昭40・8・25
荒正人『増補改訂 漱石研究年表』（集英社）昭59・6・20
『子規全集』（講談社）昭53
『定本高浜虚子全集』（毎日新聞社）昭50
阿部喜三男『河東碧梧桐』（桜楓社）平元
- ただし、引用に際しては、漢字は常用漢字体に掲げられている場合新字体に改め、ルビは省略した。

（平成六年十一月十六日受理）